

2-4

「私の毎日」を取り戻すための環境作り

～小さな声に気がついて・・・～

QOLの向上

残存能力の活用

特別養護老人ホーム きく

副フロアー長 秋元 智

介護主任 千葉 陽子

東京都江戸川区鹿骨3-16-6

介護士 佐藤 豊朗

TEL：03-3677-0303

E-mail：kyouwakai3030@orion.ocn.ne.jp

FAX：03-3677-3081

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

平成14年9月開設。特養80床・短期入所20床を備え、通所介護・居宅介護支援センターが併設されている。利用者様に安心して生活して頂けるよう、医療法人社団三和会と連携を図り、保健・医療・福祉の統合を目指している。

〈取り組んだ課題〉

病院や他施設から入所された利用者様の情報は、いくつかのアセスメントに記載されているだけで、ついその情報をそのまま受け取ってしまいがちです。しかし、本当はもっとできることがあるのではないかと、もっと楽しい生活を送ることができるのではないかと思い、与えられた情報だけにとらわれず、利用者様本人と向き合い、持っている力を生かした個性ある生活をして頂けるよう、取り組んでみました。

ここでは、入所直後に骨折が発覚し、コミュニケーションをとる時間を多く持てるようになったことで残存能力に気づき、様々な面で向上が見られたS・A様を例に挙げて紹介したいと思います。

〈具体的な取り組み〉

■ S・A様 介護度：5

⇒入所当時の様子（アセスメントによる情報）

- ・ 全日オムツ
- ・ 食事、排泄、移動は全介助
- ・ ご飯をあまり食べたがらない（ミキサー食）
- ・ 問題点として食事摂取低下による体調不良
- ・ 食事がとれず、高カロリー栄養食を摂取
- ・ 笑顔が少なく怒りっぽい
- ・ 「痛い、痛い！」が口癖
- ・ 生活全般に意欲がない

◎ 職員によるアプローチ

- ・ 食事（おやつを含む）の時間を中心とし、1日2～3時間のコミュニケーション時間を持った。
- ・ 様々な年代の職員が、代わる代わる居室を訪れた。
- ・ 多種多様な方面から話題の提供に努めた。
- ・ 意図的に質問形式をとり、本人からの発言を促した。

- ・ 食事の全量摂取を目指し、体力強化に努めた。
- ・ 骨折後のリハビリとして、専門家によるマッサージを導入した。

◎ 環境的要因

- ・ 1対1で話す時間を多く持たせた。
- ・ 骨折治癒後は、フロアーにて職員と他利用者様が接するのを見て、焼きもちを見せた。
- ・ 様々な車椅子を使用し、本人にあったものを見つけた。

〈活動の成果と評価〉

⇒入所から半年後

- ・ よくお話をされるようになった。
- ・ 食事の内容に興味をもたれた。
- ・ 食事がミキサー食から刻み食になった。
- ・ 様々なレクへ参加されるようになった。

⇒現在

- ・ その場限りの会話ではなく、家族や故郷のお話等もされるようになった。
- ・ コールを押し、「自らトイレに行きたい」という訴えがあった。
- ・ ペン習字レクへの参加を促す等しているうちに、「雑誌がみたい」という要望が聞かれた。
- ・ 会話の中で、「さみしい」という発言が聞かれた。

〈今後の課題〉

- この利用者様のケースに限らず、他の利用者様にも反映させていく。
- 決めつけをせず、潜在能力を呼び起こすよう努める。
- 利用者様の負担にならない“程度”を見極める。
- S・A様の「さびしい」という発言は、他の利用者様も抱えている思いであると理解し、皆様の小さな声を拾える介護を目指す。